

遷延性意識障害患者に対する背面開放座位の表面筋電図による効果解析 ～第2報～

岸部 友美¹、植田 愛子¹、内山 成恵¹、秋広 由美子¹、佐藤 弘子¹、小嶋 昌子¹、大久保 暢子²

¹自動車事故対策機構 千葉療護 センター 看護部、²聖路加看護大学

【はじめに】第18回意識障害学会において重度頭部外傷で遷延性意識障害となった患者8例に背面開放座位を実施し、それが筋力強化に効果的な姿勢であり、遷延性意識障害患者の看護ケアとして価値のある方法であるとの報告を行った。その後、2例の患者に実施した。【方法】座ろう君による背面開放座位を導入後、その効果をNASVAスコア(以下スコア)による意識レベル及び表面筋電図(以下筋電図とする)による生理学的指標から検証した。【対象・方法】A:40代女性 受傷後1年。B:60代女性 受傷後8年。入院後連続10日間、その後1～2週間毎、1か月毎、仰臥位・車いす乗車・座ろう君での座位で筋電図を実施した。頸部僧帽筋と脊柱起立筋の左右4部位に電極を貼付し、2分間の筋電図をとり、筋肉の緊張状態を解析した。その結果とスコア、カメラ撮影した実施中の姿勢を比較検討した。【結果】A:スコア58点→40点、背面開放座位開始後5か月頃から座位での頸部屈曲が可能となり、書字でコミュニケーションがとれるようになった。B:スコア40点で、点数変化はないが背面開放座位実施後3か月目に、頸部保持が10秒から20分保持できるようになった。また、笑顔表出が多くなり、○を書いたり、2～3mの車いす自走も行うようになった。筋電図結果は、2例とも車椅子よりも背面開放座位の方が、特に頸部僧帽筋において、高値を示す傾向にあった。【考察】事例はドーパミン製剤などの内服やリハビリ、家族の協力なども回復の効果には影響していると考えられるが背面開放座位は遷延性意識障害患者の頸部、腰部の筋力増強と頸部自力保持、表情の豊かさに有効であるといえるのではないか。